

被災した人々の苦しさと淋しさは計り知れない
人々の心の中で生き続ける見えない命は
何を伝えようとしているのか

どんなに辛いことがあっても

追憶を力にして糧にして生きていく

いぐねの庭

【いぐね（居久根）】
仙台市近郊農家の特徴的な屋敷林のことで、
様々な樹木が植えられ、奥羽山脈から吹く北風や、
海から吹く塩風からも人々を守ってきた。

作 堀江安夫

演出 杉本孝司

出演

二瓶美江

手塚政雄

樋川人美

佐藤アズサ

星野子熊

若井なおみ

脇 秀平

小川拓郎

我妻美緒

吹田真実

照明 坂本義美

美術 内山 勉

音響 馬上真勝

衣裳 山田靖子



いぐねの庭

作／堀江安夫
演出／杉本孝司

照明／坂本義美 美術／内山勉 音響／馬上真勝 衣裳／山田靖子

舞台監督／たかのきよこ

舞台監督助手／幡野寛・神谷信弘・森路敏・松並俊祐・比留間由佳

照明OP／勅使川原明子 音響OP／馬上真勝

宣伝美術／オザワミカ 宣伝写真／サト・ノリユキ

企画制作／東京芸術座 制作／嶋田みどり

協力／劇団俳優座・劇団仲間

【あらすじ】

2011年夏。

仙台市郊外の七郷と呼ばれる一帯の長喜城地区にある幸田家は、大地震で半壊の指定を受け、半年も経ても殆ど手つかずの状態。

屋下がりの幸田家の茶の間に、座卓を挟んで向き合っているのは、福永陶吾と妻の夏苗。夏苗の両親の幸田伸介と溪子、兄の伸也。卓の上には一枚の書面。

木々の梢を震わす蝉時雨とは対照的に、地震の傷跡も生々しい室内は沈鬱な静寂が支配する。

何れの肩にも焦燥感と切迫感、そして疲労感が重く張り付いている。長い沈黙に耐えかねたように話を切り出す。

九演連の皆さんへ

2012年の「蟹工船」例会以来となりますので楽しみにしております。

「いぐねの庭」の作者堀江安夫氏の実家が仙台。作者の思いを届けたいと巡演して来ました。

「蟹工船」例会の時に私たちを迎えて下さった皆さんの熱い想いが今でも忘れられません。

頑張ります！



～ 暮らしの中に演劇を ～

宮崎市民劇場

第201回例会

2026年4月5日(日) 開演18:30(開場18:00)

会員制 入会金・月会費(大人2500円・学生1500円)

会場: 宮崎県立芸術劇場 演劇ホール(メデキット県民文化センター)

問い合わせ ☎880-0805 宮崎市橋通東3-3-8 カフトビル3F 0985-62-0075